

陳述書

原告 荒井 晴彦

目次

第1、略歴

第2、映画「やわらかい生活」の製作過程について

第3、「年鑑代表シナリオ集」へのシナリオ掲載の拒否問題

第1、略歴

1947年、東京生まれ、都立立川高校卒。

1969年、早稲田大学第二文学部抹籍。

1971年、足立正生監督の『噴出祈願 十五才の売春婦』に助監督として付き、以後若松プロダクションの脚本を執筆する。

1973年からピンク映画の助監督を務め、渡辺護、山本晋也、中村幻児監督の脚本を執筆。

1976年から田中陽造氏の清書係。

1977年、日活ロマンポルノ『新宿乱れ街 いくまで待つて』で脚本家デビュー。

1980年、『赫い髪の女』『神様のくれた赤ん坊』『ワニ分署』で第3回日本アカデミー賞優秀脚本賞を受賞。

1981年、『遠雷』でヨコハマ映画祭脚本賞受賞。

1982年、『遠雷』『嗚呼！おんなたち 猥歌』で第5回日本アカデミー賞優秀脚本賞を受賞。

1984年、『Wの悲劇』でキネマ旬報脚本賞、毎日映画コンクール脚本賞受賞。

1986年、『Wの悲劇』『ひとひらの雪』で第9回日本アカデミー賞優秀脚本賞を受賞。

1988年、『噛む女』『リボルバー』でキネマ旬報脚本賞受賞。

1999年、『皆月』で大阪映画祭脚本賞受賞。

2002年、『KT』とテレビドラマ「事故」で第5回日本シナリオ作家協会菊島隆三賞受賞。

2003年、『ヴァイブレータ』でキネマ旬報脚本賞、毎日映画コンクール脚本賞、ヨコハマ映画祭脚本賞を受賞。

2006年、『やわらかい生活』『愛妻日記』テレビドラマ「指」で第9回日本シナリオ作家協会菊島隆三賞受賞。

1997年、『身も心も』で監督デビュー。

また、1989年より現在に至るまで季刊「映画芸術」の編集・発行人を務め、日本映画の普及と向上に努める。

そのほか、「悪魔に委ねよ 大和屋笠映画論集」、「映画脚本家 笠原和夫 昭和の劇」などの書籍編纂・制作を行なう。

2004年に刊行した「シナリオ 神聖喜劇」では未映画化にもかかわらず第8回日本シナリオ作家協会菊島隆三賞を受賞。

2005年、「争議あり 脚本家 荒井晴彦 全映画論集」を刊行。

第2、映画「やわらかい生活」の製作過程について

1、2003年4月に映画「ヴァイブレータ」(監督：廣木隆一。脚本：荒井晴彦。プロデューサー：森重晃。主演：寺島しのぶ)が完成したあと、プロデューサーの森重晃と監督の廣木隆一と脚本の私(荒井晴彦)の3人で、また何かやらないかと企画をそれぞれ探していました。候補の原作の中に文学界2003年6月号に掲載されていた被告の絲山秋子氏の文学界新人賞受賞作「イツ・オンリー・トーク」や前年2002年12月号に掲載された大道珠貴氏の芥川賞受賞作「しょっぱいドライブ」がありました。そこに女優Xから廣木監督と仕事がしたいという申し出があったので、廣木監督と私が、じゃあ「しょっぱいドライブ」はどうだろうかと森重プロデューサーに言い、森重プロデューサーが女優Xに打診したところ、老人と三十女の話はWOWOWの「センセイの鞆」でやっているの、ちょっと乗らないという返事でした。じゃ「イツ・オンリー・トーク」はと森重プロデューサーが聞いたところ、女優Xの返事はOKでした。それで、女優Xのスケジュールに合わせて、2004年6月撮入という予定で脚本を私が書くことになりました。それが2003年7月頃のことです。

そこで、廣木監督と私と森重プロデューサーの3人を代表して、森重プロデューサーが「イツ・オンリー・トーク」の原作者に映画化の申入れをし、2003年9月、原作を管理する文藝春秋との間で原作使用契約を締結しました。2、「イツ・オンリー・トーク」は「引っ越しの朝、男に振られた、やってきた蒲田の街で名前を呼ばれた、ED¹の議員、鬱病のヤクザ、痴漢、いとこの居候 遠い点と点とが形づくる星座のような関係、ひと夏の出会いと別れを、キング・クリムゾンに乗せて『ムダ話さ』と歌いとばす」と文庫の帯にあるように躁鬱病の女主人公と彼女をめぐる四人の男たちとの交流を章立てにして描

¹、「勃起不全」のこと。

いています。

しかし、章立てのエピソードをただそのまま並べるだけでは映画になりません。そういう映画もないことはありませんが、やはり観客が見やすいのはひとつの話でしょう。ひとつの話にするにはやはり、恋、愛と別れしかないだろうと思いました。しかし、登場人物の中で、女主人公の相手たるにふさわしいのは、いとこなのですが、これが原作では、いつも、死にたいと電話してくるような男で、中学生か高校生にしか思われません。で、小説のかなり後半で、四十男だとバラされるわけですが、映画では登場した途端に年齢はバレてしまうわけで、この引っかけは使えません。で、女主人公より若くするか年上にするか悩んだあげく、原作の設定通り四十男にすることにしました。

原作の最後は男女雇用機会均等法によって総合職として就職した大学同期の友だちの墓に参るところで終わっていました。友だちはアメリカで交通事故で死に女主人公は発病し、背景には総合職の女の挫折とバブル崩壊があるようでした。しかし、それは映画としては見えにくいと思いました。私は、発病の原因を95年の阪神大震災とオウムサリン事件、2001年9・11のニューヨークの同時多発テロにすることにしました。

3、脚本の第一稿を書き上げたのは2004年の2月頃だったと思います。第一稿を読んだ原作者の意見を森重プロデューサーが聞きました。それによると、本人のブログを使用しないでくれ、女主人公に九州弁を喋らせないでくれというようなことだったと思います。女主人公に部分的に九州弁を喋らせたのは、いとこ同士の会話ということと、かつて子供の頃から近所で育ったという設定にした方が二人の関係性が分りやすいと思ったからでした。結局、脚本の決定稿ではブログの使用も止め、主人公の九州弁の使用もラストの「そげなこと……せんでもよかったとに……」だけにしました。この決定稿を書き上げ、脚本が完成したのは2004年3月頃のことです。

しかし、「決定稿を読んだ女優Xから、この脚本ではできないと言ってきた」と森重プロデューサーから聞かされたのは、もうクランクインまでにそう間がない頃でした。撮影は延期になりました。映画業界で撮影延期ということはその企画の流産を意味しています。しかし、この決定稿を読んだ「ヴァイブレータ」主演の寺島しのぶが「私、やりたい」と申し出てくれたのです。捨てる神あれば拾う神ありでした。寺島しのぶのスケジュールに合わせて11月クランクインということになりました。

原作者から「イツ・オンリー・トーク」というタイトルを使わないでくれと言ってきたと森重プロデューサーから聞かされたのは、クランクイン前か直後だったかでした。原作者はあの決定稿でもまだ不満なのだなと思いました。しかし、ある俳優事務所の女社長のシナリオを読んで号泣したという感想などを聞いて、私はこのシナリオでいけるのではないかと思っていたので、原作者の不満を自分の書いた小説と違うというだけの不満で、よくあることだと思っていました。

2004年11月にクランクインした映画は2005年2月頃完成し、『やわらかい生活』というタイトルで公開されました。

そして、この映画や脚本は次のような評価を受けました。

映画

- ・シンガポール国際映画祭 最優秀作品賞
- ・第28回ヨコハマ映画祭 ベストテン8位
- ・第2回おおさかシネマフェスティバル賞 助演男優賞（豊川悦司）
- ・第8回バルセロナ・アジア映画祭で、審査員特別賞&最優秀監督賞
- ・サンダンスフィルムフェスティバル 上映
- ・プラハ映画祭 上映
- ・ドーヴィル映画祭 廣木監督特集で上映
- ・2006年函館イルミネーション映画祭 オープニング上映
- ・川崎市市民ミュージアム『脚本家 荒井晴彦』特集で上映
- ・日本映画プロフェッショナル大賞 2006年 主演男優賞（豊川悦司）
- ・日本映画プロフェッショナル大賞 2006年 特別賞（廣木隆一）
- ・日本映画プロフェッショナル大賞 2006年 ベスト10 第3位
- ・キネマ旬報 2006年度日本映画ベスト・テン 第12位
- ・映画芸術 2006年ベスト（日本映画）第1位

シナリオ

- ・第9回菊島隆三賞
- ・2006年度の年間代表シナリオに選出

ところが、そのあと、全く思いがけない問題が勃発しました。

第3、「年鑑代表シナリオ集」へのシナリオ掲載の拒否問題

1、私は、シナリオに不満だから『イツ・オンリー・トーク』というタイト

ルは使わないでくれという原作者の要求を受けて、タイトルが『やわらかい生活』になったことで、原作者の「不満」問題は解決したと思っていました。だから、2007年6月、「06年鑑代表シナリオ集」へのシナリオ掲載が原作者から拒否されたと聞いた時は驚きました。


映画は一年前に公開され、DVDも販売され、レンタルもされ、そのあとにはテレビ放映もされてるのにどうしてシナリオ掲載が許されないのか、と。

私は、自分の書いたシナリオがなぜ公表できないのかという素朴な疑問と怒りを「年鑑代表」掲載拒否に覚えましたが、それ以上にこれから脚色（原作付きの脚本）の仕事をする場合に、まず目指すことが、いいシナリオを書くではなく、原作者が気に入るシナリオを書くになってしまうことに絶望を感じました。悪いシナリオからいい映画ができることは決してあり得ないが、いいシナリオから悪い映画ができることはしばしばある、とは私たち、脚本家の間ではよく言われていることです。そのいいシナリオかどうかが原作者の私意、あるいは恣意に委ねられてしまうというのでは、シナリオの未来、映画の未来は絶望的だと言わざるを得ません。

シナリオは原作のためではなく、映画のために書かれるものです。そこが分らない原作者は、映画化の申し入れを拒絶するべきだと思います。

以上、陳述いたします。

2009年6月27日

荒井晴彦 

東京地方裁判所 殿